

北海道のJGAP普及本格化

上川農業改良普及センターで初の研修会開催

1月14日北海道当麻町の上川農業改良普及センターで、同普及センター、(株)愛農(旭川市)そして当社との共同企画で農産物の安全担保や環境保全型農業を実現するJGAPの研修会が開催された。上川普及センターが、各地区の生産組合、JA職員、町役場、普及センター関係者などに呼びかけ約80名が出席した。当センターは2010年度「GAP普及推進事業」で、順次研修会、現地研修、先進地視察研修を進めていき、JGAP認証取得へ向け積極的に取り組んでいく。



これまで北海道では、2つのJAがグローバルGAPを団体で認証取得しているが、上川普及センターは、JGAPの認証取得を目指している。それは同普及センター伊与田主査が、欧州のグローバルGAPと同等性認証を取得していて、国内の主な大手流通業者等が支援し、そして導入コストが安いJGAPを調査し選択したからである。伊与田主査は、各種研修会に参加し、自ら審査員研修も受講し審査員としての資格を取得している。府県先進地の高いモデルの農場を視察し、上川地区にもJGAP農場を核にした、地域でGAPに取り組む事を目指している。上川地区にJGAP農場を増やし、上川産地のブランド化を図り、農産物の販売に活かすことで地域農業を活性化するのが狙いだ。地域として買い手から信頼される産地としてJGAPを導入し、認証取得することが産地として生き残れると確信している。

ドリームファーム井澤が昨年認証取得、道内認証農場数13

地域としては、東川町の(有)ドリームファーム井澤が、昨年JGAP認証取得している。ブロッコリーや大根、南瓜、馬鈴薯、ミツバ等230haの耕作面積だ。社員、契約社員・パート含め105名でJGAPを研修し半年で昨年5月認証を取得した。(株)愛農の千田部長が導入指導し短期間での認証取得となった。衛生面の改善や、整理整頓、書類の整理見直し、クレーム対応、救急対応、若干の施設の改善などで審査を受けた。従業員の意識改革に一番時間がかかったらしい。施設内土足厳禁、禁煙である。あちこちから視察者が多く対応が大変らしい。道内のヨーカ堂や府県の生協、イオングループなど、販売先が広がったとのこと。昨年は、天候不順で全てに販売できなかったが、今年はさらに取り引きを拡大したい意向とのこと。

上川地区のJAや生産組合も積極的にJGAP導入を図る

今回の研修会で、上川地区の普及員やJA職員がJGAPの各研修会に参加し、JGAP指導員資格を取得して、生産者の導入を支援してくれると力強い。普及に拍車がかかる。同普及センターの事業計画では、JGAP指導員研修会、団体認証講座などJGAP導入に向けたあらゆる研修会、講演を計画している。指導員による現地指導など一年間の計画が立案されている。北海道でJAや普及センターが中心に、地域ぐるみでGAPに取り組む始めると一気に北海道全体にGAPの導入が進みそうである。

全肥商連・全複工共催賀詞交歓会

生源寺教授による 『今後の農政と農業の課題』

1月20日、全肥商連・全複工共催賀詞交歓会が東京ガーデンパレスにて開催された。平成21年度事業の推進について、全肥商連の組織強化事業報告、新農政の推進の戸別所得補償制度の考え方、第47回全肥商連全国研修会のご案内などの後、恒例の特別講演会があった。今年は、東京大学大学院 農業生命科学研究科長 農学部長 生源寺眞一氏による『今後の農政と農業の課題』について講演があった。



“食料問題の新局面と農業・農政のゆくえ”と題

して、食料問題の新局面、変わる国際環境について先ず話が始まった。近年、食料相場は長期的には上昇しており、その原因は投機資金の流入、穀物などの燃料への転用、オーストラリアの2年連続の早魃に代表される異常気象の頻発による供給不安である。食料の不安定要因は増加しているが、問題は食料市場の中長期の見通し。食料は絶対的な必需品であり、日本のカロリーベース自給率はフードセキュリティとして限界の局面に達していると喚起された。

次に大規模農業については、大規模化するほど生産コストが下がるとはいえないというのである。つまり、稲作の大規模生産は10haを境に経営コストは減少しない。日本農業の強みは、高品質の農産物を生み出す『ものづくり』のDNAであり、日本農業の強みを活かした農業が重要。農産物の属性(情報)が多様化している中、生産者の情報発信力がものを言う。そして、これからはもっと東南アジアに目を向け、経済成長と共に日本と他のアジア諸国の農業競争力が次第に接近することが予想され、もっと農産物の輸出に目を向けるべきだ。中国は1戸当りの耕作面積が日本の1/3しかなく、生産性は落ちると見ている。経済発展とともに賃金が上昇するにつれ価格は上昇し、今後は一面ではお互い顧客同士であり、一面では世界の食料調達をめぐるライバルでもある関係が深化していく。世界の食料需給の将来を左右する大きな要因がアジアの食と農の動向であると説かれた。

そして、日本は農業の担い手が増加しない現状で、専業、兼業を問わず農業人口を支えるべきなのではないかと言われた。所得水準の高い社会において、農業を職業とする場合、ある一定規模の農地面積の確保は必要であり、農業経営を厚みのあるものにするためにも、農業生産から食品産業までを多角的に経営することが必要であり、また、農産物の安全性だけでなく、生産者の福祉や、安全を販売に生かすことが出来ないか。つまり、GAPの実践と活用である。そして政権が変わっても依然として重要なことは、農業者の若き担い手作りであると強調された。

2010年スギ花粉前線予測

今年もそろそろスギ花粉の心配をする季節になってきましたね。花粉症の方には少々気の重い日々がきます。今年は、早いところでは2月上旬から飛び始めるようです。東京は2月中旬あたりからです。ただし、09年の夏の天気あまりよくなかったことから、09年春に比べて、花粉の量は少なくなる予想のようです。スギ花粉はよく晴れた、暖かい日に飛び始めます。花粉症の皆さん、マスクや目薬の用意はいかがでしょうか。花粉は飛び始めると60日程度は飛び続けますので、今から十分なご用意を。



先日、数年振りに海外に行く機会がありました。外国人の中にと、日本人の良さと物足りなさを感じました。海外に行くのは、異国の文化・歴史の知見を広めるだけでなく、自らを顧みるのにもいい機会ですね。

編集局長：小田原次洋 アシスタント：助川尚子

電話：03-5802-2011/E-mail：journal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>